

特定外来生物第二次指定植物・北海道の現状

千歳市 五十嵐 博

はじめに

環境省は特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律（外来生物法）を平成17年6月1日に施行した。アライグマ、カミツキガメ等37種が特定外来生物として指定（第一次）され、飼養、栽培、保管又は運搬や輸入が規制されるようになった。さらに、平成18年2月1日より、第二次指定としてアメリカミンク、ウチダザリガニ等32種の特定外来生物の政令が施行された。また要注意外来生物リストとして植物では84種を掲載した。とかく動物に目が向けられる傾向が強く、新聞紙上などで大きく取り上げられたが植物は比較的軽微に扱われている。この特定外来生物二次指定植物に関して道内での分布や被害・駆除報告などの現状を報告する。

第一次指定

植物で第一次指定に選ばれたのはナガエツルノゲイトウ、ブラジルチドメグサ、ミズヒマワリの3種であったがどの種も暖かい所を好むためか北海道での確認報告は見られない。

第二次指定

アゾルラ・クリスタタ（アカウキクサの一種）、アレチウリ、オオフサモ（パロットフェザー）、オオキンケイギク、オオハンゴ

ンソウ、ナルトサワギク、オオカワヂシャ、ボタンウキクサ（ウォーターレタス）、スパティナ・アングリカの9種であり、この中で北海道ではアレチウリ、オオフサモ、オオキンケイギク、オオハンゴンソウの4種が確認されている（五十嵐 2001）。以下に個別に第二次指定4種の分布状況などを整理した。

要注意外来植物

今回の84種指定された要注意外来植物の中で以下に示す38種（分類群）が北海道で確認されている。環境省コードナンバー順に整理するとエゾノギシギシ、ハリビユ、ハゴロモモ、ハルザキヤマガラシ、オランダガラシ、イタチハギ、ハリエンジュ、ムラサキカタバミ、イチビ、メマツヨイグサ、ドクニンジン、セイヨウヒルガオ、アメリカネナシカズラ、チョウセンアサガオ属、ワルナスビ、ヘラオオバコ、ブタクサ、オオブタクサ、カミツレモドキ、ネバリノギク、アメリカセンダングサ、アメリカオニアザミ、ヒメジョオン、ヒメムカシヨモギ、ハルジオン、キクイモ、ブタナ、セイタカアワダチソウ、オオアワダチソウ、外来タンポポ種群、オオオナモミ、コカナダモ、キショウブ、カモガヤ、シバムギ、シナダレスズメガヤ、オニウシノケグサ、ネズミムギ（ホソムギ含む）、オオアワガエリで約

46%ある。しかし、他の要注意種がすでに侵入してくるかもしれない。今回はこれらの種に関しては詳しく述べないが、現在までの調査で道内に広く分布し確認地点数の多い種はエゾノギシギシ、ハルザキヤマガラシ、オランダガラシ、イタチハギ、ハリエンジュ、メマツヨイグサ、ヘラオオバコ、ブタクサ、ネバリノギク、アメリカセンダングサ、アメリカオニアザミ、ヒメジョオン、キクイモ、ブタナ、セイタカアワダチソウ、オオアワダチソウ、外来タンポポ种群、キショウブ、シバムギ、オニウシノケグサ、ネズミムギ（ホソムギ含む）、オオアワガエリなどの22種（分類群）である。これらは特に侵略性が強く、今後各地で各種の問題を起こす可能性を秘めている。また、今回は未指定であっても他に道内で今後問題のある種は数知れない。

アレチウリ（ウリ科）

Sicyos angulatus

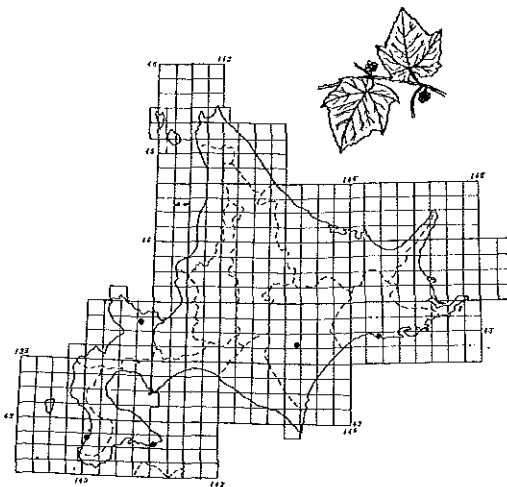


図1. アレチウリの北海道分布 2006

本種は北米原産のツル植物である。現在までに確認した産地は図1に示す2.5万地形図名で仁木、帯広南部の2地点である。文献報告は余り見あたらないが各種情報などにより、上ノ国、戸井、釧路の3地点が集められ合計で5地点と少ない。本州では大群落が報告されているが、北海道での最大は帯広市大空団地付近の空地の約1haが最大である。仁木での確認地は面積も少なく、他は狭い範囲に生育するとの情報である。五十嵐（1999）で報告したが帯広市の例は大豆、小豆などの選別クズを投棄した場所で1999年調査ではオオブタクサなども確認された。2006年調査でも衰退しておらず相変わらずはびこっていた。仁木の例はやはり空き地へのゴミ投棄と思われた。他の情報産地は見えていないので何とも言えないが同様の環境と思われる。道内では本種に関する被害報告や駆除報告は聞いていない。本種はゴミ処理をきちんと行えば拡大を阻止できる種である。

オオフサモ（アリノトウグサ科）

Myriophyllum aquaticum ; *M. brasiliense*

本種は南米原産の水草である。道内の環境では越冬しづらと思われるが数例の現地確認と報告が見つかった。現在までに確認した産地は図2に示す2.5万地形図名で石狩(海岸の小沼)、札幌北部(伏籠川)、札幌東北部(モエレ沼、篠路拓北川)の3地点である。各種文献によれば、桑原（1966）茅沼（共和町）、原（1992）札幌東部、原（1979）苫小牧、上川（情報）の4地点が

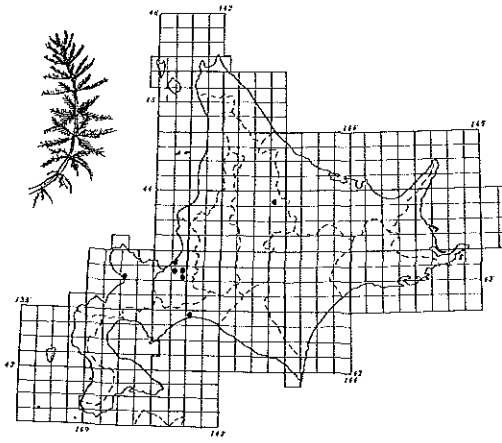


図2. オオフサモの北海道分布 2006

拾い出せたが合計で7地点と少ない。確認箇所は流れのほとんどない河川、沼などで金魚などと共に人為的に廃棄された可能性が高い種である。現在までの状況では被害報告や駆除報告は入っていない。筆者の調査範囲は河川が多く、沼は比較的見ていないので今後調査が進めば確認産地は増加する可能性が高い。本種は人為的な投げ捨てを禁止すれば拡大を阻止できる種である。

オオキンケイギク (キク科)

Coreopsis lanceolata

本種は北米原産の園芸植物である。現在までに確認した産地は図3に示す15地点である。本種に関する分布情報や文献はほとんどない状態である。園芸種であり河川・道路緑化などにも使われており、これらが逃げ出すことがある。文献では逃げ出したものも数年で消失すると書かれている。本州などではかなり問題化されているが道内では余り騒がれていないようである。被害報告や駆除報告は一切聞いていない。本種

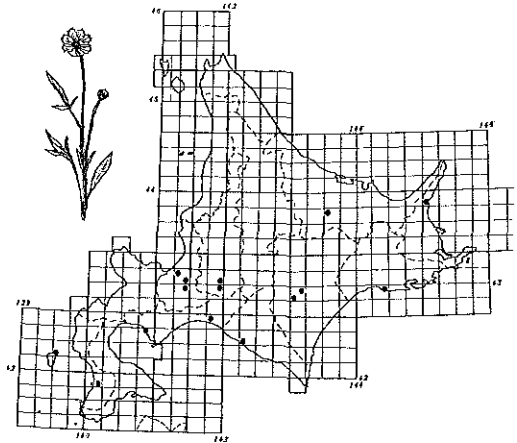


図3. オオキンケイギクの北海道分布 2006

オオハンゴンソウ (キク科)

Rudbeckia laciniata

本種は北米原産の植物で明治期に導入した際は観賞用として入り、類似種のハナガサギク (ヤエザキオオハンゴンソウ) やキヌガサギク (アラゲハンゴンソウ) 同様に庭などに植えられたものが逃げ出したものと推定する。現在までに確認した産地は図4に示す470箇所である。一部、文献などの産地も図示してある。本種はほぼ全道に広がっており、登別、利尻島、旭川など各地の湿原などで抜き取りなどの駆除活動が開始されている。今更といった状態で拡大繁殖しており駆除するのは難しいと思われる。草刈りでは駆除できないので丹念に引く抜くことしか考えられない。ここまで拡

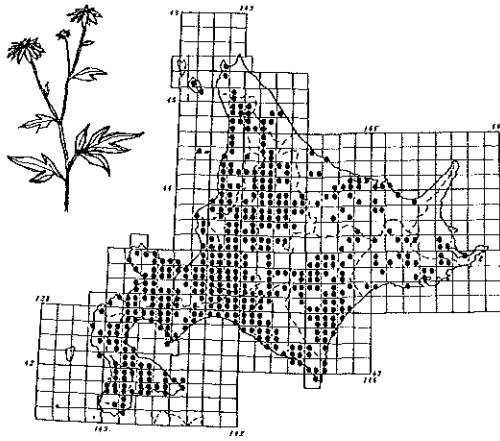


図4. オオハンゴンソウの北海道分布 2006

大した本種を駆除することは至難の業であろう。種子の散布形式の詳細は不明であるがタンポポ類のような風散布ではないと思われるので土砂移動や張芝などに混入することで拡大したものとと思われる。

他の3種もそうであるが、本種は今回図示した470地点以上に拡大しているものと思われる。空白地帯は山岳地帯などの未調査箇所でもある。

まとめ

2006年2月1日に環境省が特定外来生物第二次指定した北海道に生息する4種の分布や特性、駆除などの現状を報告した。アレチウリ、オオフサモ、オオキンケイギクの3種はまだ道内にはびこっておらず被害や駆除の報告は確認できなかった。オオハンゴンソウは道内ではほぼ全域に拡大分布しており、被害報告や駆除の報告が数例あ

る。しかし、2006年度に入り申請の煩わしさなどを理由に駆除が中断する事例も聞えてきた。

要注意外来植物を列記したがこの中で今後問題が起これそうな種としてはハリエンジュ、キショウブ、アメリカオニアザミなどが考えられる。指定されていないがコウリンタンポポ、キバナノコウリンタンポポ、シャグマハギなどが現在道内各地で拡大中である。

次頁から各地での外来種の現状と駆除などを報告してもらおう。

(北海道野生植物研究所)

参考文献

- 原松次 (1979) 北海道いぶり地方植物目録。文化女子大学室蘭短期大学研究紀要 3:1-56.
- 原松次編著 (1992) 札幌の植物—目録と分布表—。154pp. 北海道大学図書刊行会, 札幌.
- 五十嵐博 (2001) 北海道帰化植物便覧。195pp. 北海道野生植物研究所, 札幌.
- 五十嵐博 (1999) 北海道野生植物研究所報告 11:2. 北海道野生植物研究所, 札幌.
- 池田清彦監修 (2006) 外来生物事典, 463 pp. 東京書籍, 東京.
- 環境コミュニケーションズ (2006) 緑の読本2006-2 シリーズ76. 特集・身近な外来種—植物編—. 96pp, 東京.